総　記

柴田　武

総記の執筆は展望号編集時の編集委員長が書くことにいつからか決まっている。委員長の任期は三年で展望号は二年ごとであるから、委員長は在任中に一回担当すればすむ計算であるのに、先任の辻村委員長の任期が変則だったために、筆者はこうして二回続けて総記を書くはめになった。

先回は、総記は「展望の展望」だと考えて、①展望欄の歴史的展望と、②当該号の展望記事の共時的展望とで組み立てた。しかし、今回、①をくり返すにはあまりにも時間が隔たっていないので無意味と考えられるし、②だけでは所定のページ数を埋められそうにないし、執筆にとりかかった現在、展望記事が全部そろうところまで行っていない。

そこで、今回はまったく別の視点から総記をまとめることにした。それは、文部省の科学研究費補助金採択課題を展望して、現在どういう研究が志向されているかを見ることにする。科学研究費は、こういう研究がこれからしたいという申請に対して与えられるものであるから、ここでとりあげる昭和五十五年度と五十六年度の採択課題はまだ研究成果を生み出していない。実質的な成果は数年度にあらわれるものと考えなければならない。

科学研究に対する補助金は、奨学金などの名で民間団体からも出ているが、なんといっても文部省の科学研究費はすべての科学研究分野をカバーし、その額も昭和五十五年度分で三百二十五億円、五十六年度で三百五十八億円という大きさである。国立大学における教官研究費は実際には大部分、光熱水道などの経常費に消えてしまって、実質的に個人または教室に割り当てられる研究費（多くは書籍費）はきわめて少額で、これでまともな研究ができるとは思われない。それを補うものが文部省の科学研究費で、特に国費では融通のきかない謝金、旅費が容易に使える。謝金、旅費、さらに特別の設備費を要する研究は、科学研究費を利用すべきだと考える。

聞くところによれば、国として大学や個人の研究状況を測定する客観的基準はこの科学研究費の申請数と採択数しかないという。国語学の展望を科学研究費補助金採択課題によって試みる意義の一つはこの点にある。

文部省の科学研究費の採択は二段階、複数の審査員による審査で決まる。したがって、すべて水準以上の研究計画と見なすことができる。

しかし、注意しなければいけないことは、研究者と課題とが必ずしも結びついていないことがある点である。多めの研究費を獲得するためとか、大学院生の研究を成立させるためとかに、他の研究者の名儀で申請する研究課題がある。国語の文献による史的研究に印欧語の専門家の名で採択されている例が昭和五十六年度の課題のうちにあった。その点では、若い人を対象とする奨励研究は心配がない。奨励研究は交付金が少額だけれども、その課題をその研究者が研究しようとすることにまちがいがないからである。本稿でも、どちらかというと奨励研究や一般研究を中心に展望しようと思う。

採択課題を数か年度通覧すると、申請者が多少固定している感じを受ける。同じ研究者が毎年のように申請して採択されている。一方、科学研究費などは眼中にないという研究者もいる。また、一度試みて、こりごりだという研究者のいることも知っている。それは、申請の書類を書くのが厄介だし、研究費は夏休み中か夏休み後にしか交付されず、しかも、会計処理という研究と無関係なことに頭を悩ますことはいやだという研究者である。

それに、画期的な研究や、すばらしいアイディアは必ずしも科学研究費の研究から生まれていない。むしろ個人のポケットマネーから生まれ、ベッドの上や電車の中で、何もしない（研究費を要しない）時間のなかで出て来る。科学研究費はそういう研究やアイディアを具体化するために利用されるべきものであろう。試みに、多少軽い気持で申請したのが採択されてしまって、遂行と会計処理に苦しむというのは、話が転倒している。

さて、昭和五十六年度の場合、採択件数は約一万二千件で、そのうち国語学は、もしそれを狭い範囲でとらえると、わずか十六件である。人文・自然・広領域の三分野に分けた人文の件数が一千四百七十八件であるから、十六件は人文全体のなかでもわずか一％弱でしかない。

外国語を対象にしたものは別にして、言語一般――それは多く日本語を材料としている――を扱ったものは、実はほかに四十七件もある。純粋国語学の約三倍に当たる。

狭い意味の国語学の研究と思われるものの内容を見ると、索引作成・文献調査が最も多い（五十五年度七件、五十六年度六件）。ついで、現地調査による方言研究である（五十五年度四件、五十六年度五件）。この二つの分野が謝金と旅費がなければどうにもならないことから考えて当然のことである。

純粋国語学以外の言語研究で目立つのは、一つは子供の言語発達に関する研究で、そのうち特に、「認知」をめぐるものである。「言語構造と認知様式の対応関係に関する研究」（岡山大、永田博）、「対話行動の認知科学的研究」（京大、辻井潤一）、「思考と言語に関する認知科学的研究」（東大、東洋）のような課題が十件ある。（昭和五十六年度）。研究者の所属も必ずしも教育学部に限られず、文学部、工学部でもある。

もう一つ目立つ言語研究は、コンピュータが介在するもので、これはほとんどすべて工学部関係の研究者である。その一部は課題名を読んだだけでは筆者には理解できないようなものである。内容がおぼろげにしかわからないが、その分野の一つの関心事は「高水準プログラミング言語」の研究にあるらしい。昭和五十六年度に限っても五件がそれで、東大、京大、阪大、福井大、宇都宮大の研究者がとり組んでいる。いずれも日本語という言語情報をどう処理する

かということに目標がある。

この種の研究のうちには、われわれ国語学者の興味をそそる課題名も目につく。一般に奨励研究は規模が小さいので、課題名も特定化されていて、その内容が部外者にもよくわかる。たとえば、「汎用手書き文字認識に関する研究――手書き変動に不変な部分パターンの抽出」（福井大、小川秀夫）、「有声・無声破裂音の自動検出と識別」（東京農工大、小畑秀文）、「音声の調音的・音調的特徴の生成規則にもとづく連続音声合成方式」（東大、広瀬啓吉）のようなものである。

昭和五十五、五十六年度を通じて最も注意を引く研究動向は、対照言語学的研究が盛んになろうとしていることである。両年度で十件あるから、相当の数である。ただし、二件は一年度だけの申請が二か年続いているものであるから、課題の種類としては八件とすべきである。

川本茂雄「日・仏語の対照言語学的研究」（総合A、昭和五十五年度から）

柴谷方良「日本語・朝鮮語の比較、対照研究」（一般C、昭和五十五年度から）

右の二件は、課題名だけからは、対照の焦点が意味にあるのか、文法にあるのか、あるいは言語構造の全般にわたるのかはっきりしないが、次の課題ははっきり概念構造の対照研究と打ち出している。

山梨正明「日英語に於ける述語の概念構造に関する理論的・実証的研究」（奨励A、昭和五十年度、五十六年度）

次の二件も焦点をしぼっている。

山本和之「他者の心的感覚的状態の表出に関する日英語の比較研究」（一般C、昭和五十六年度から）

池上嘉彦「英語基礎語彙の意味分析（日本語・ドイツ語との対照言語学的視点を含めて）」（一般A、昭和五十五年度、五十六年度）

次は応用言語学的観点の加わったものである。

小野寺和夫「語彙の対照言語学的研究成果に基づく二言語辞典の意味記述方法の研究」（総合A、昭和五十六年度から）

小池生夫「第二言語の習得における日本人とアメリカ人の子供の比較研究」（一般C、昭和五十六年度から）

大河内康憲「中国語と日本語の対照研究――特に中国人への日本語教育に資する語彙語法の比較研究」（総合A、昭和五十六年度から）

対照される言語も、日本語と英語3、日本語とフランス語、日本語とドイツ語、日本語と朝鮮語、日本語と中国語それぞれ1で、なかなか多彩である。

もし国語学を、日本語だけについて、文献によって過去の言語および過去から現在に至る歴史的研究ということにすると、ここで扱った範囲はあまりにも広すぎた。国語学の分野を、展望号で立てている柱、すなわち言語構造の各面と、言語生活・方言・数理的研究の範囲にまで広げてみても、ここで扱った分野の半分（件数で）もカバーできないほどである。

しかし、研究分野というものはそうはっきり分断できるものでもないし、そうすることはかえって科学研究にとってマイナスである。たとえば、

荻野綱男「コンピュータによる言語地図作成」（奨励A、昭和五十五年度）

風間喜代三「電子計算機によるきりしたん版『ぎやどぺかどる』

の定本および総索引の作成」（一般C、昭和五十六年度）

これらはそれぞれ方言研究、文献研究でもあるが、コンピュータを使うところに重点がある。特に前者は、コンピュータのプログラム研究といってもいいだろう。また、

長尾真「言語辞書活用のための計算機プログラムシステムの開発と言語辞書の解析」（試験、昭和五十五年度から）

は、国語学者としても無関心ではいられない課題で、現に研究分担者に国語学者、言語学者が参加している。また、

外間守善「沖縄久米島における言語・文化・社会の総合的研究」（総合A、昭和五十五年度から）

は、特に言語を文化から特出させて、人文科学の学際的研究を目ざしたものである。この研究は、国語学、特に方言研究に大きな貢献をなすことが期待される点で国語学と関係がある。

なお、文部省科学研究費補助金の採択課題は、毎年、科学研究会編『文部省科学研究費補助金採択課題一覧、昭和〇年度』（株式会社ぎょうせい発行）として発表される。そのうち、言語関係のものは『国語年鑑』に、国立国語研究所の見解によって抜き書きされたものが「科学研究費等の交付状況」の項にまとめてある。

――埼玉大学教授――